

メーキャップ 状況
 11月5日(水) 和歌山西R.C. 加藤 裕司、西本 亨
 11月5日(水) 和歌山東南R.C. 堀岡 忠男、山野 武彦

ニコニコ箱

ありがとうございました

三毛理一朗さん 村田さんのご厚意で下手な私に卓話を命ぜられました。お聞き苦しい点は何卒友情に免じてお許し下さい。
 山東 勝彦さん 三毛先輩ご苦労さまです。
 伊藤 裕通さん 三毛さんの卓話たのしみです。
 岩橋 五郎さん お花をいただきありがとうございます。
 河本 清邦さん Wifeに美しい花を有難うございます。
 松田 洪毅さん 11月1日土曜日に行われました「こぼと学園」の子供達との楽しい「みかん狩」に参加をさせて頂きました。田中社会奉仕委員長又役員の皆様ご苦労様でした。
 岡野 年秀さん 先日のこぼと学園の園児とのみかん狩りには多数の参加ありがとうございます。
 谷口 文利さん 三毛さん、本日の第二話大変楽しみに待っていました。
 野上 泰造さん 家族旅行に御参加を!
 中山 恒夫さん 三毛さんの卓話楽しみます。
 堀岡 忠男さん 「こぼと学園」みかん狩り行事に際し、社会奉仕委員長の田中完児さん御苦労さんでした。
 岸裏 廣澄さん 三毛さん源氏物語の卓話楽しみにしています。
 田中 完児さん この前のこぼと学園のみかん狩りでは、みなさんご参加ありがとうございます!!
 阪神タイガース応援団一同 八幡丸の応援のニコニコもありがとうございます。
 八幡 建二さん 三毛さん、本日卓話楽しみにしています。
 前田 成蔵さん 三毛会員本日の卓話ありがとうございます。
 樫畑 友洋さん 三毛さんの卓話たのしみです。

【本日の累計 58,852円(計16名)(お誕生日お祝い 314,000円 皆出席 55,000円 その他 1,138,870円) 累計額 1,507,870円】

本日の例会 11月13日(木)
 ●クラブフォーラム「ロータリー財団」
 ●皆出席表彰
 松田 洪毅さん 1年皆出席 通算11年
 ●ピアノ演奏 中井 利枝さん
 オーシャンゼリゼ (Deignan)
 想い出のサンフランシスコ (G.Cory)

前回の例会 11月6日(木)
 ●卓話「源氏物語第二話」
 当クラブ会員 三毛 理一朗さん
 ●ロータリーソング 島 公造 ソング委員長
 「奉仕の理想」
 ●ビジター紹介 野上 泰造 親睦委員長
 和歌山R.C. 湯川 進さん
 ●出席報告 島 公造 出席委員長
 会員数56名(内出席規定適用免除会員9名)

11月6日(本 日)	39名	83%
10月23日(メーキャップ後)	休会	

次回の例会 11月20日(木)
 ●クラブフォーラム「米山奨学会」

市内ロータリークラブ情報	クラブ	日時	内容
	和歌山城南R.C.	11月13日(木)	卓話「財団奨学生を経験して」2003-2004年度財団奨学生 小関 彩子さん
	和歌山南R.C.	11月14日(金)	卓話「税を考える週間よせて」和歌山税務署 署長 折井 卓さん
	和歌山中R.C.	11月14日(金)	クラブフォーラム「R財団」
	和歌山北R.C.	11月17日(月)	例会変更
	和歌山アゼリアR.C.	11月17日(月)	第4回クラブ協議会
	和歌山R.C.	11月18日(火)	卓話「海外の人材活用による和歌山の活性化」坂本 順一会員
	和歌山西R.C.	11月19日(水)	優良工場見学「資源リサイクルセンター(株)松田商店」
	和歌山東南R.C.	11月19日(水)	クラブ活性化・例会委員会「有本・青木元会長対談形式」

国際ロータリー第2640地区 和歌山東ロータリークラブ 創立/1959年2月23日
 例会場/ルミエール華月殿 和歌山市屋形町2-10 TEL (073) 424-9392 例会日 木曜日 12時30分
 事務局/〒640-8142 和歌山市三番丁6関西電ビル5F TEL (073)432-4343・FAX (073)432-4845
 会報・広報委員会 嶋 弘伸 古屋 光英 笹島 良雄 武田 慎介 吉田 篤生



2008~2009年度 国際ロータリーのテーマ
「夢をかたちに」 ~Make Dreams Real~

2008~2009年度 和歌山東ロータリーのテーマ
「ロータリーの魅力再発見」

国際ロータリー第2640地区
和歌山東ロータリークラブ U.R.L. http://www.werc.jp
 E-mail. info@werc.jp

2008年 11月13日(木) 週報 / VOL.50 No.18(通巻2381)



会長報告

八幡 建二 会長



皆さん こんにちは。日の暮れがだんだん早くなって、もうすぐそこまで冬が来ているのを感じる今日この頃でございます。風邪も流行っていますので、皆さん健康には十分注意していただきたいと思ひます。先週土曜日には恒例の、こぼと学園の子供たちを招き矢田農園でみかん狩りとバーベキューを楽しみました。田中社会奉仕委員長をはじめ、メンバーの皆様方にも多数ご参加いただきましてありがとうございました。10年ほど続けておりますが、おかげさまで今年も良い天気で一日を終え、子供たちにも喜んでいただけたと思ひます。

また、今週の日曜日にはこちらも恒例になっております和歌山駅前のロータリー花壇の花の植え替え行事がございます。市内9クラブのメンバーが集まって10時から行います。お時間の許す方は是非一人でも多くの方のご出席をお願いいたします。

本日は地区ロータリーの広報の記事を配布しておりますのでご覧ください。私の所信挨拶でお話しましたが、今年はロータリーの対ポリオ運動にビル・ゲイツさんから1億ドルをいただくということですが、ただ条件として我々全世界のロータリーメンバーも今年から一人30ドルを3年間に渡り出して1億ドルを作り、ビル・ゲイツさんとあわせて2億ドルで、だんだん少なくなっているポリオを撲滅するという運動に入っております。どうかご理解の程、宜しくお願ひいたします。

幹事報告

前田 成蔵 幹事



- ・地区ロータリーの広報記事配布のご案内
- ・和歌山駅前のロータリー花壇の植え替え 11月9日(日) 10:00から
- ・当クラブ理事役員会 11月13日(木) 11:30より 華月殿 3階 牡丹の間

50周年記念誌

笹島 良雄 委員



先般皆様のお手元に50周年記念誌に載せるコメントなどのお願ひが届いたと思ひます。基本的には八幡会長の意向で来年2月21日の当日にお渡しする予定です。先日委員が集まって、みんなが読んでくれるものを作ろうではないかということになりました。そういうわけで皆様からもコメントを頂戴することになりました。400字とさせていただきますいておりますが、400字が上限でございますので、できるだけ早くご提出いただきたと思ひます。また41周年からの会長に「力点」「想い出」「効果」などをまとめていただきたと思ひます。

委員会報告

親睦委員会

野上 泰造 委員長



何度もすみません。16日の家族旅行でございますが、あと5名ほどお願ひしたいと思ひます。宜しくお願ひいたします。

いから、人を呼んでも無駄ですよ」と言う。女の方はその声で女性憧れの源氏と分り、ほっと安心して源氏を受け入れてしまいます。

別れの際に源氏は、お名前をお聞かせ下され、さもなくばどうやって今後お便りが出来ましようか。このまま別れてしまうとは、まさかお思いではありませんまいに。と申しますと

うき身世に やがて消えなば 尋ねても 草の原をば 問はじとや 思う

不幸な私がこのままこの世から消えてしまったら、名乗らなかつたからといってあなたは草の原を分けてでも私を尋ねようとはなさらないのでしょうか と、しっかりと悩ましく答えます。源氏は

いづれぞと 露のやどりを わかむまに 小篠が原に 風もこそ吹け

お名前伺ってはいないと、どれが露のようにはかない貴女のお宿かど捜しまわっている間に、小篠の原に風が吹いて噂が立って私達の縁も絶たれてしまいましたよ。

と言い終えぬうちに、人々の気配がしきりにあちこちするので、是非もなく、互いに扇子だけを逢瀬の証に取り交わして名乗りあいもせずにあわただしくその場は別れました。

この段階では源氏はその女が、自分を目の敵と憎む弘徽殿の女御の娘、つまり政敵である右大臣の娘で、自分の兄である皇太子の婚約者だということは知りませんでした。また女の方も自分が誰であるかは明していません。朧月夜の方では、東宮妃としての栄光の未来をこの一件で失うという覚悟まではついていませんでした。

三月になって右大臣家の「藤の花の宴」に招かれて、あの姫君は誰であったのか、物腰や素振りから右大臣の姫君の一人だろうとの見当はつけていたので、酔ったふりをして姫君たちの居る寝殿に近づき、そこで、矢張りあの女性は右大臣の「六の女君」即ち六番目の娘で、自身の兄、東宮の許婚者だったことを知ります。

その後朧月夜は、源氏との例の一件の醜聞が漏れたことで東宮妃という光栄な未来を失いますが「御匣殿」として宮仕えをしています。

源氏二十三歳の十月に源氏の父である桐壺ノ帝は崩御し、兄の東宮が朱雀帝として即位します。年明けには朧月夜の君は「尚侍」として入内します。ということは、彼女を愛する朱雀帝は源氏との醜聞のバレにより「中宮」や「女御」の身分でのお妃ではなく、更に格下の「尚侍」としての入内です。兄の帝は他の誰よりも寵愛しますが、然し朧月夜の君は、いまだに源氏が忘れられずに相変わらず内密に文通を続けていきます。

帝が代変わりし、権勢は急速に右大臣側に移り、弘徽殿ノ太后は、これまでの屈辱の復讐を露骨に遂げようとします。帝は気が弱く、強い皇太后や祖父の右大臣の言いなりで、源氏の義父の左大臣は辞職し、天下の権勢はすっかり右大臣側に移ります。

源氏はそんな中で、朧月夜との危険な密通を続けます。

気の弱い帝は二人の仲を知りつつも朧月夜を愛する余り、一向にとがめません。翌年の夏、病気のために右大臣邸に里帰りをしていた朧月夜と源氏は大胆にも、右大臣邸で毎晩のように密会を続けていましたので危険この上もありません。そんなある夜、凄まじい豪雨と雷鳴があり、その夜も二人が忍び逢いをしていた処へ、雷鳴におびえた女房達が大勢、朧月夜の部屋に逃げ込んできましたので、帳台、即ち寝床から出られなくなってしまいました。その上運悪く其処へ右大臣が突然見舞いに来て、いきなり部屋の中へ入って来ました。せかせかと見舞いを言った右大臣の声に朧月夜は気も動転して、そっと帳台から出て父右大臣の前に出ると、その衣裳の裾に男帯がからまった俣、引きずられている。その上几帳の下には男用の畳紙が落ちていて、それに源氏の書いた字があります。愕いた右大臣が帳台を覗き込むと、源氏が臆面もなく、寝乱れた姿で横になっている。あまりの事態に逆上した右大臣は弘徽殿の太后に総てを告げてしまいました。

激怒した太后は、今度こそ源氏を失脚させるべく、それを口実にして抹殺を計ります。この俣では当然島流しに会うことを予測した源氏は、先手を打って自ら畿内でも最も西端の須磨ノ浦のあばら家へ惟光等数人の男のみの従者と共に隠匿してしまいます。

何れまたの機会があればということ で終わります。

卓 話

源氏物語第二話

三毛 理一朗 会員



平成20年、源氏物語の千年紀と定め、11月1日、その記念日とされましたが、その根拠は紫式部自身が書き残した「紫式部日記」の中に歌人の藤原公任が、紫式部に向かって源氏物語を引用して言った言葉が書き残されております。その日から丁度千年目にあたりますので「千年紀」とされました。

然しこの物語は実際には、長保3年(1001年)夫の藤原宣孝と死別した頃から書き始められておりますので、公任が「あなかしこ…」といった時点では、既に約8年の歳月を経ており、物語の中程以上にも書き進められて、世評も高くなっておりましたからこそ、作者の紫式部に対して、その様に語りかけたのであって、私に言はせると、本当の千年紀は書く始めの長保3年より千年後の平成13年頃であったと思っております。

藤原道長の長女「彰子」は一条天皇の中宮として入内し、寛弘5年(1008年)には出産のため里帰りをして、その2ヶ月後に敦成親王(後の後一条天皇)が誕生され、その年の11月1日には親王誕生50日の祝いが道長の豪邸「土徒門第」にて盛大に行われています。その折に中宮彰子の女房の一人として仕えていた紫式部に向かって、藤原公任が「あなかしこ、このわりに 若紫や さぶらう」と言ったことが「紫式部日記」に記録がありますので、その辺を根拠として2008年を「千年紀」と定められました。

源氏物語については以前にお話をしました時に、光源氏が末摘花と一夜を共にした翌朝、夜が白み、雪明りで彼女の顔を始めて見てびっくり仰天した、何故に驚いたのかは丁度時間が来ましたので、何れまたの機会にということ で終わっていますが、その後2、3の会員さんからの、その訳の質問を受けておりますので、今日はその辺からお話を進めてみます。

－＊－＊－＊－＊－＊－

第六帖 末摘花のお話します。

末摘花とは紅花の別名で、紅を採る赤い花卉の花で、現在でも食紅等はこの花びらから採取されています。彼女の鼻の先は紅花の様に赤かったのです。尚その上に、普賢菩薩は象の背を座していますが、その菩薩の像の鼻の様に彼女の鼻は長く伸びていたのです。それで驚いたということですが、この時代、殿上人の貴族社会では男女の仲は最初から顔を見合う様なことはありません。まして手や肌を触れ合うこともありません。深窓の姫君の廻りは、女房たちがしっかりとガードしており、その上外部に向かって自分の仕えている姫君の宣伝係もつとめます。うちの姫君は器量が抜群だとか、諸芸、文学等に秀でているとか、巧妙な口コミ作戦によって宣伝します。その噂に乗って貴公子達は先ず恋文を届けます。恋文は和歌と決まっており、文字の上手下手や、歌の出来栄えから男性の値打ちが判断されます。そしてその男性が姫君の結婚相手にふさわしいと女房たちが判断すると、姫君の方は女房達からそそのかされ、促された上で、始めて自筆の返事を男性宛に送ります。自身の意志を持たず、自己主張も出来ずに周囲のお膳立てによって動くということでした。

それで気の利いた男は先ず女房を手なづけ、その女房の手引きで姫君の寝所へ導かれる。そうなるど姫君は抵抗のしようもない。互いに姿顔かたちも知り合わないのに。その様なことで末摘花の様な事態も生じることもあり得るということ です。女房を手なづけるには袖の下が物を言うし、更にもっと手っ取り早く、男は女房と情交を結び自らの女に先にしてしまうこと を聞かせます。光源氏の場合には彼の乳兄弟である惟光という忠実な執事が仕えており、この惟光がまた主人に劣らぬ手の早い男で、主人の意を受けて、先ず惟光が相手方の女房を自分の女としてしまい、その女房の手

引きによって総てお膳立てが整った上で、主人公の出馬という手法が他にも色々と出て参りますし、またその事後の後始末も惟光が片付けるというケースが幾多見られます。話は末摘花に戻りまして、彼女は常陸宮のお姫様ですが、父の宮は早逝され、その後お独りの身となられ、今は零落の身で、数少ない女房達に、かしづかれ乍らの心細い境遇のお姫様でした。琴の音の優れた姫君であるとの噂を耳にした源氏は彼女の女房頭である大輔ノ命婦をうまく取り込んで彼女との逢瀬を設営して貰う訳です。

梅の香りのゆかしい十六夜の月の美しい夜、大輔ノ命婦の手引きで末摘花のお屋敷へ忍び込み、彼女と結ばれたということです。その後幾度か逢う瀬を重ねておりますが、当時のランデブーの夜の一刻は、今の時代では想像もつかない程薄暗く、顔かたちもお互いに判然としないうままの逢う瀬であり、共に一夜を過ごした男は夜の明けない暗いうちに、姿を見られないように彼女の許から去って行きます。家に着くとすぐに手紙を書いて女の許に届ける後朝の別れであり、これを後朝の文と申し、女への礼儀であり、早ければ早い程誠意があるとされ、そして三日間は必ず欠かさずに通う。これを怠ると男の方では気に入らなかつたということで、女性にとっては大変な屈辱となります。

この様に数回の一夜を重ねた上で、ある朝雪明りで初めて彼女の容貌を知り、その後はすっかりと忘れ去り縁切り状態となりますが、この純真な末摘花はあくまでも源氏を信じ切り、末永く操を通します。後年源氏が須磨浦への謹慎の身を許され、再び政権の座に復帰し、権勢を取り戻しますが、其処に至って始めて末摘花の貞節を知り、落ちぶれ果てて零落の身の彼女に厚き援助の手を与えます。再び枕を交わしてはおりませんが「東ノ院」としての館を与え終生まで茶飲み友達として優遇しています。

光源氏は随分多くの女性達と関係を持ちますが、何れもが殿上人の身分の高い女性達ですが、その中で只一人、中流階級の女性で「夕顔」という人が登場します。第四帖 夕顔のお話です。源氏はある日五条の、ごみごみと小さな家の建て込んだ界隈にある乳母の宅へ見舞いに立ち寄ります。三歳で生母と死別した源氏はこの「大式ノ乳母」により育てられましたので、重い病気にかかっていることを知り見舞いに寄られます。乳母の家の外でその門の開くのを待っている間に、隣の小さな家の垣根に咲く白い夕顔の花に惹かれ、その花が取り持ち、その家の女を知り、通うようになります。

源氏からの花の所望に心あてに それかどぞ見る 白露の 光そへたる 夕顔の花 当て推量に、あのお方かしらと見当をつけております。白露の美しさでこちらの夕顔の花もいっそう美しくなります。と、白い扇子に書を書き添え、夕顔の花を添えて差し上げます。折り返し源氏から 寄りてこそ それかとも見え たそがれに ほのぼの見つる 花の夕顔 もっと近くに寄って、はっきりとお目にかかろうと思います。夕暮れ時にぼんやりと見えた花の夕顔を、との返歌が届けられます。興味を持った源氏は、その後自分の素性を隠して通いはじめてゆきます。実は第二帖 帚木の中での「雨夜の品定め」女性論の座談会で、源氏の正妻、葵ノ上の長兄であり、源氏の親友でもあり、また女性関係でも常にライバルである「頭の中将」が思い出話として、子供ま

でもうけたのにフト行方を、くらましてしまった素晴らしい女「常夏の女」の話が出て参ります。これが後の第四帖「夕顔」の出現の伏線です。また夕顔の帖の終わりに、この女の連れ子の女兒があることを知り、養育すべく、夕顔の死後その行方を尋ねますが果たせません。読者に対して後日、源氏とのめぐり逢いを期待させます。これがずっと後年の第二十二帖「玉鬘」登場の伏線で、この物語は色んな処で将来登場してくるであらう人物を伏線を張って予告している素晴らしい手法をとっています。十五年もかけて書き上げられた長編物語の五年、十年も先に、まみえるであらう人物を前以って暗示しておくという先手と先見の明には只々感嘆の外ありません。

夕顔は素性を明かさないうまま、源氏に心身を預けきって付いて来ます。源氏自身は世間をはばかり、また身分素性のバレることを恐れて、何時も布で顔をかくし、覆面をし、変装し、身分を名乗らずに異様な出会いが度重なりますが、夕顔の方ではおうよその見当はついております。互いに親密も深まりましたので、彼は覆面をとって顔を見せ「何うだい、この顔は、ご感想いかが?」と言う様な意味の歌を自信たっぷりに詠みかけました。

夕露に ひもとく花は 玉鉾の たよりに見えし 縁にこそあり

夕べの露に夕顔の白い花が開く様に、私が今覆面を外し顔をお見せするのも、あの通りすがりの垣根の白き夕顔の花のとりもつ縁からですよ。

と申しました。すると彼女は、流し目にちらりと顔を見て

光ありと見し 夕顔の上露は たそがれどきのそら目なりけ

即ち前に覆面の脇から素顔をそっと覗き見をして、素敵だワと思ったのは、あれは黄昏時のひが目だったのかしら。間近かで見ると大したこともない様だ。

との返歌でやんわりとやり返す様なユーモアも解するし、またとっさの気転も利く女性であったのです。互いに身分も明かさず可憐で謎めいていて、温和しくて、男の求めるままになり乍ら、相手の身も心も殆のようにとろけさせ、水のように男の隙間をも満たそうと、びったりと密着してくる、まるで我というものが全くない様な男性にとってはこの上ない耐え難い程の最高の女性であったのですが、八月十五日満月の夜、人の住まない廃居にて光源氏と密会の夜、悪霊に襲われ、アワ!!と言う間に頓死してしまいます。

彼女の思わぬ急死に源氏は大層嘆き悲しみ、翌日亡骸と別れをしたその帰路、思わず落馬する程自失してしまい、茫然自失のあげく寝込んでしまいます。

夕顔の死後、彼女に女房として仕えていた「右近」を源氏は引き取り彼の女房の一人に加えて面倒をみます。その結果始めて夕顔の素性が判り、父は三位の中将で夕顔はその娘でしたが、父は早くに亡くなっておりました。右近は彼女の乳母の娘で幼少の頃から夕顔に仕えており元々は殿上人のお姫様であったということ です。深く夕顔を愛していた源氏は彼女を回想して、

見し人の けぶりを 雲と眺むれば 夕の空も むつまじきかな

恋しい人を葬った煙、もしやあの雲かと眺めていると、淋しい夕暮れの空もなつかしくて。

と、右近に対して独り言をつぶやかれましたが、右近にはご返歌申し上げるすべもなく、只自分の代わりに女君の夕顔がここにいらっしやったらばと胸がいっぱいになってくるのみでした。

－＊－＊－＊－＊－＊－

第八帖 「花宴」光源氏の政敵である右大臣の娘「朧月夜」との出逢いが登場して参ります。

源氏二十歳の春二月、紫辰殿の左近の桜の宴の果てた後、酔心地で弘徽殿の細殿に行くど、三の口が開いているので、するりと中へ入って行くと、廊下の向こうから「朧月夜に似るものぞなき」と若い身分の高そうな女性が古歌を口ずさみながらやって参ります。酔心地の源氏はすれ違ひさま、女の袖を捕えて、横の細殿に抱きおろしてしまい、そこで情交を結んでしまいます。女が驚いて事の前に人を呼ぼうとすると、彼は「わたしは何をしても誰からもどがめられな